

## 回 想 録\*

日 高 孝 次\*\*

## 目 次

1. 郷里の環境	299
2. 中学校に入学する	300
3. 七高時代の思い出	302
4. 東大理学部物理学科1年生	303
5. 関東大震災のあとさき	303
6. 中国へ旅する	303
7. 中央気象台に就職	304
8. 初航海	305
9. 学位と帝国学士院賞を受ける	305
10. 野満先生と壺井伊八さん	306
11. 海に学ぶ	306
12. 海洋観測法の成立まで	307
13. 皆既日食の観測と北洋の海氷探検	307
14. 初渡米	308
15. 太平洋学術会議について	309
16. 日本海洋学会の創立	311
17. 昭和16年——心機一転——人生は40から	312
18. 岩波茂雄さんのこと	313
19. 戦時研究と私	314
20. 疎開と戦後	315

## 1. 郷里の環境

私の生年月日は明治36(1903)年11月4日、生地は宮崎県宮崎郡広瀬村大字下田島字袋堀9611番地、現在の宮崎県宮崎郡佐土原町である。父は徳太郎、母はトミ、女2人、男兄弟7人と家族は多かった。太平洋が宮崎県(日向国)に接する直線状にほぼ南北に走る海岸線から2軒と離れてない寒村に生まれた私は、幼ない頃から自分の生活環境が一般の人たちの住居に比べて大変広いことを意識していた。まず敷地150米×300米位、東大の本郷キャンパスの半分はあったように思う。幕末の頃私の

故郷では大抵住居が3, 4軒づつ群集していたようで、その各戸の盛衰は一様でなく、衰えた家は家人が他所に移り、その跡地は残った家族で最も有力なものの敷地に買収される習慣のようであった。そして私の生家の敷地も何家族かが立去った跡の敷地を吸収して、残っている家族はたしか2軒しかなかったようである。

そういうわけで私の生家の敷地も家屋も大変広かった。私が中学にいた頃父はまた家屋を新築して広げた。家屋の周りには広い庭園があり池も2つほどあった。築山があり、表の座敷から見て築山の裏にはまた広い庭が連なり、テニスコートがあった。そしてさらにその向こうには亭々たる樹木や野菜畑があって、私どもの家で食

\* Reminiscences.

\*\* K. Hidaka, 東京大学名誉教授, 日本学士院会員.

用にする野菜が作ってあった。またこの畑と反対の端は主として桑が養蚕のため沢山植えてあった。

この広大な敷地に父親は地主として君臨していたが、極くたまに油絵を描いた。若い時東京に出て国学院に学び傍ら中沢弘光、岡田三郎助、三宅克巳等の大家たちと共に油絵を学んだとのことであった。

敷地の周囲の大部分は幅2～4米の溝で囲まれ、多少汚れた水が流れて小さい魚や虫が泳いでいた。またその外側は自宅で消化する米を作る青田になっていて、おそらくその面積は10町歩にも及んでいたであろう。3月はレンゲが一面に毛氈のように咲きみだれ、5月ともなれば田植の時期でこの青田の間のいくつかの狭い溝が敷地の周りの溝に連絡し、きれいな水を苗代に送っていた。私は梅雨時に豊かな水で潤っているこれらの溝で小魚や虫を捕って遊んだことを覚えている。

小学校に上がるようになって理科関係のものが好きなことに気が付いた。うちが農家で農機具を格納する小屋があり、その入口に木製の長いすが2つ向合って取付けてあったが、まもなくそこは私の工作室になった。いろいろな物を作ろうと考えたが、まず計画したのは機関車を組立てることだった。小屋の中に散在しているいろいろの金具の破片を使い、足りないものは何とかして供給する計画だったが、なかなか実際にはうまくいかない。その頃宮崎市と延岡市とを毎日小型自動車が1往復するようになったので、今度は自動車の模型を作ってみたくなった。自動車にはタイヤがあるのでタイヤをゴムで作ろうと思った。もちろんタイヤを自分で近寄って見たわけではないので、どのようなゴムでできているのかというのはいっこうにわからない。まあ模型だからゴム消しの細長いものをたくさん買ってきてそれを車のまわりに捲付ければいだろうと考えた。しかしそれではもちろん走るわけではない。

そのうち中学校の試験を受ける時期が来たので試験勉強をはじめた。たぶん5年生の後半か6年生の1学期であったと思うがよくは覚えていない。自宅にはたくさん部屋があり、中に他の部屋から隔離された納戸があってそこで勉強することになった。もちろん誰も中に入る人はいない。そのかわり今のようにヒーターはないので大変寒かった。しかし中学の試験は数学、国語、物理、化学といったようなものが主で、もちろん自分の好きなものは望むわけにはいかなかった。ちょうど父が東京から取寄せた日本百科大辞典とかいう大きな本があったので、それを持込んで試験準備の方をさぼって読みふけっ

た。事実そうまじめに勉強したと思わない。

## 2. 中学校に入学する

試験は13歳の4月であったと思う。自宅から12軒程南に離れた宮崎市にある宮崎県立宮崎中学校を目指したわけであるが、試験もそんなにむずかしかったとは思わない。何とかパスしたので宮崎市の広島通りに面した叔母のうちに置いてもらって約2軒ぐらの距離を歩いて中学校に通った。途中に広い池があって、夏が過ぎて秋になると池の畔のハゼの木が紅葉して美しかった。しかし酷寒になるとその池の表面は堅く凍ってしまう。宮崎は今でも雪はめったに降らないといわれているが、事実この池が凍ることは稀にしかなかった。

その頃父が上京して何かみやげを買ってくるというので「化学の本が1冊欲しい」と所望したところ高田徳佐先生が書いた「無機化学」という本を買ってきた。大変立派な500頁くらいの本で、おそらく中学4年生から旧制高等学校位の生徒の参考書に使われていたものと思う。もちろんこの本をすらすらと読めたわけではないが、私はいくらかわかるような気がして毎日縁側に腹ばいになりながら読んでいると、3年生の兄の同級生が見せろといってやってくる。その上の4年生にも友達いたので凄いな男たちが続々と習いに来たものである。私はその他天文や物理や鉱物も好きであった。宮崎の市内に修進堂という本屋があったが、中学生の使う教科書はだいたいここで取りついでいた。その他に物理や化学や生物の高級な本も書棚にいくらか並んでいた。私はこういう本屋に行って棚の上に並んでいる本を見ることは何となく恥ずかしかったが、どういことが書いてあるかと思っ、そっとガラス戸を開けて本を引きずり出し手に取って開いてみたが、大変重い本であった。けれども内容はおもしろそうだったので、つい熱心に中を見ながらそういう本を次から次と調べていったが、その書店の主人がこれを眺めていて、小さい中学校の生徒が大きな本を開いて見ているのが不思議だったのであろう。「おい、おまえはそういう本を見てわかるのかね。」と半ば怒鳴るような口調で尋ねるので、私はその本を元の所にもどして逃げて帰った。その頃私は物理、化学それに動物、植物、鉱物といった自然科学には大変興味があったが、数学には余り興味はなかった。

夏休みに村に帰って遊んでいたが、2学期になると兄の同期生などが盛んに下宿に押しかけて来ていろんな遊びをするのであるが、その頃の流行は模型飛行機であった。何でも朴の木で軽く機体を作ってプロペラを糸ゴム

でまわすもので、機体を軽く作ればずいぶん長い間飛行する。私は模型飛行機の製作には大変興味を感じ、毎日作っては飛ばすことに凝っていた。その頃叔母のうちは広島通りから何でも高松通りという所に移転していて2階建てで、その片側にはよその畑が広がっていた。2階から飛ばす方が遠くまで飛ぶと思ったのでやってみたが、空の方高く舞上がったためしはほとんどなく、大抵は前の畑の中に落ちるのが関の山で、成績はすこぶる不良であった。

2学期が終わりに近づいた頃模型飛行機に愛想をつかし、今度は写真をやりたくて、写真機械を大阪から取寄せて何とかすばらしい写真を写そうと計画した。当時は今のようなフィルムで写す機械はなくて、ガラス製の乾板と称するものだけで、陰画はPOPと称する紙に太陽の光で焼付けるシステムであった。しかし下宿では写真を焼くのには不便なので、今度は十何軒も離れた自宅から汽車で通学した。だんだん冬が深くなってくると日が短くなって、授業が済んでうちに帰ると太陽の光が暗くなりなかなか思うように焼けなくなるわけで、もう授業なぞほったらかしで急いで家に帰るのであるが、そういう状態では勉強などできるはずがない。案の定2学期には成績が76番に落ちた。入学した時の16番に比べて余りの不成績だったのに少々反省して、何とか今学期は取返そうと考えたがなかなかそうはいかない。3学期も大体似たような状態で、成績は今までほどに上がらなかった。

2年から3年にあがる3月、私は兄と2人で叔父のいる東京へ工業博覧会を見にいった。東京には従弟が3人いて歓迎してくれた。他に私どもの姉が共立女子職業学校を卒業して九州に帰ることになっていたの、3人で帰ってこいという両親の言付けであった。その時博覧会が開かれていたのは、不忍池の畔であった。品川駅で汽車を降りて従弟や姉につれられて東京見物をしたのであるが、私のような田舎者にはすべてのものが宮崎と大変違うので、見るもの聞くもの皆珍らしかった。とにかく東京見物をして親類の家を3、4軒訪ねて春休みの終わりに宮崎に帰ることができた。この東京見物において私が得た収穫はもちろん多かったが、特に博覧会の性格が工業技術に重点が置かれていて、理科が好きだった私としては大いに役に立った気がした。

その頃私の中学校はおそらく日本一の野蛮中学であったと思う。乱暴な学生がいて教師をなぐったり、教師の着物を破ったりした。当時森本清造という大変決断力の

ある校長が赴任してきて、教師や生徒の中にいた不穏分子を追放し、新しく善良な教師を迎えるという計画に着手した。これに対して生徒の中の不穏分子は教師の中の不穏分子と結んで、森本校長を排撃しようとしてストライキを計画しているという噂がもっぱらであった。このような状況の中で私は2学期を終えたが、3学期に入ってしばらくしてからのある月曜日、私が自宅から汽車で宮崎に出て下宿に着いてみたところ、兄と従兄とがいて「校舎が焼けちゃったよ」というので私はびっくり仰天して「それはまたどういうわけだ」と聞いたけれど誰も教えてくれない。おそらく知らなかったのであろう。しかし一般の状態から判断するに、なにぶん生徒の間にも教師の間にも不穏分子がたくさんいたので、恐らくその連中がやったに違いないと、生徒も教師も同様に考えていた。そこで教師の間に査問委員会ができて、生徒の間から注意人物をピックアップした。その結果、上級の生徒の中から退学・停学を命ぜられたものが数十名に達した。またその前年の秋、大淀川の河口にあった入江でボートレースが行なわれたが、終了後校長を囲んで教師達が付近の料亭でまさに慰安会を開かんとしたとき、不穏の学生たちが数十名乱入し、校長は床下に逃込み、かろうじて難をまぬがれたが、教師の大部分は洋服をズタズタに引裂かれ、その大部分が借衣装であったという気の毒な事件があった。このような不穏な状況が何回か重なって、おそらく森本校長も決断せざるを得なくなったのであろう。しかしこの徹底的な処置は大変効果的で、それ以来不穏な問題はほとんど起こらなかった。そして生徒の蛮風も一掃されたようである。その間に私は2年から3年になり、兄は4年から5年になって卒業していった。

この頃私の父は新築の校舎に非常に近い所に手頃な住宅を1つ買求め、これに前から私の下宿していたうちの叔母たちを住まわせ、そして私も弟と共にそちらに移ることになった。兄は自宅が農家であるので、東京農業大学を志願して将来自作農に打込む決心を示したが、私は次男であったので、秘かにどこかしかるべき旧制高等学校を選んで受験する決心をした。むろん今のような学習塾とか家庭教師のお世話になったことはない。模型飛行機も写真もいさぎよくかなぐり捨てて、朝は6時起床、夜は11時就寝として試験勉強が始まった。

この頃森本校長の方針に従って着任された先生の中に7年間の滞米を終えて帰国、直ちに赴任して来られた英語の中村賢二郎先生がおられた。私は新しい家で受験勉強を始めて以来、近くの宮崎神宮の第一鳥居から社殿に

通ずる参道を歩いて新校舎に通っていたが、ここでよく中村先生および先生を尊敬する学生たちと合流し、先生に啓蒙的なお話を伺いながら、1年後に高校を受験しようという輝かしい希望を抱く学友たちと楽しく登校することにしてた。先生は日露の役で満州に戦い、肩に敵弾を受けて後送されたが、その瞬間、祖国の将来のために東洋の一角にくすぶることを止めて広く世界に発展すべしとの靈感を受けられ、やがて米国に渡り、滞在7年間7つの大学に学んで帰国されたという。

4年いっぱい登校したけれども5年に上がってからは1度も登校したことはない。それはその前の年から高等学校は4年からでも受験できるようになったためである。4年生の頃はまだそうでもなかったが、5年になってからはすべて受験に打込み、部屋も叔母や弟の好意で気持ちのよい部屋を優先的に提供してもらった。ちょうど玄関の脇の4畳半の狭い部屋であったが、小じんまりとまとまっていた。門の前には広い畑が遠くまで連なり、農夫の牧歌が毎日聞こえてくるといった野趣に富んだ生活で、時々書物ばかり見ている目をならした。

### 3. 七高時代の想い出

7月のある日、鹿児島に出て第七高等学校造士館で受験、試験は確か2日間で終わったように記憶する。中学の同級生で受けたのは何人かいたが、パスしたのは私の他に富川政雄、それに是枝恭二、それから五高を受けたのが竹内次郎外1人であった。合格通知を受けたのは7月の末頃で、8月いっぱい長い間の試験勉強の塵を久しぶりに洗い流すため、もっぱら昼寝で過した。先輩の通知によると、理科甲類の中で私の合格順番は17番だったと聞いている。

鹿児島では父の従弟の鳥原氏が鹿児島県農事試験場長で、上ノ園という所に住んでいたのも、そのお宅に下宿することになった。しかし遊び癖がまた出て写真をやりたくなくて、たびたび勉強を放棄するようになった。1学期の成績は再び100番位に低下した。

鹿児島は南国で大変史蹟に富む町で見るところが多いが、中でも磯という海岸の散歩道は風光明媚で大変気持が良い。鳥津75万石の威勢は何百年か続いているので国中が鳥津で固まったような所である。明治10年の役で西郷隆盛以下戦死した人たちの墓のある浄光明寺などは、墓石に亡くなった数百名の名前がいちいち書いてあるので興味のある人には大変楽しいところであろう。

1年生のある晴れた日、物理の村上春太郎教授が校庭に大きな望遠鏡を据付けて太陽の観測をしておられた

が、生徒にもものぞかせてくださるという話を聞いたので行ってみた。先生は50歳位だったろうか、きちっとした学者タイプの紳士で大変博学な方だと聞いた。この望遠鏡は先生が英国のオットウェイ社に注文して作らせたもので性能もすぐれているという話である。生徒が十何人も並んで順番を待っていたが、私もその後が続いた。太陽が径5寸位の球のようで黒点も明瞭に見えた。私は天文が好きではあったが、望遠鏡をのぞいたことはそれまでに余りなかったので大変興味を覚えた。

2年になって私達は物理の講義を村上先生から聞いた。物理全般に大変学識の深い先生で、特に天文学に関する話となると大変熱がこもった。話がケプラーの法則とかニュートンの話とかスペクトル分光とかに及ぶと魅力的な講義をされた。

このように私は次第に村上先生の人柄に魅了されていた。そしてついにはたまらなくなって、ある日突然村上先生を御自宅に訪ねた。実のところ先生の長男である村上清明君が同級生であったので、私は先生の御都合を彼に聞いて出かけて行ったのである。しかし彼と先生は親子でも余り話をしなかつたらしく、先生は御存じなかったようであった。私は先生に、天文学に興味を持っていて将来天文学に進みたいし望遠鏡も欲しいと申し上げた。なにぶんお話を申し上げたのははじめてであったので、折入った話には進まなかったけれども、私は大いに満足して辞し去った。

そしてそれから夜となく昼となく空のことを考えて、小型でもいいから望遠鏡が必要であるとの結論に達した。1級上の岡山の人で星島四郎という人が先生に頼んで3時半の望遠鏡を確か350円で買った話を先生から聞いた。星島さんは岡山の旧家の御子息であったようだが、私には金がなかったので、そんな高価な物は買えそうになかった。そこで先生を再び訪ねて、望遠鏡はどの位の値段でしようかと伺った。先生は「実はある目的で手元に2時半のオットウェイ製を保管しているが、何ならこれを120円で譲ってもよろしい。」と言われたので、これは願ったり叶ったりと今後の方策を考えることにした。

私は資金を調達するために約半年雇めしをやめて60円を貯めた。そして父親に、こういう次第で120円の半額を貯めたから後の半額を出して欲しいと書送り、2年生の冬頃120円を携えて先生のお宅に伺い、望遠鏡を受取り、大きい木箱を肩にかつぎながら池の上町に引上げた。別れるとき先生はニコッともしないで「雇めしぐらいは食うんですな」といわれた。

高校2年の終わり頃静かなところにいたいと思い、前記浄光明寺に近い池の上町の中島さんというお宅に下宿を移した。母屋とは垣根や庭木で遮断された6畳と3畳の2部屋ある平屋の静かな家であった。3畳の部屋は勉強に、6畳は寝室に使っていた。食事は朝夕母屋で済ませた。この静かな下宿は大学の受験勉強に精進する私に幸すること多大であった。

その下宿の庭に望遠鏡を持出していろいろと天体を観測した所、近所界限から見物人が押寄せ、中島さんの周りもここしばらくは賑わった。

3年になると大学に進むことを考えて勉強を始めた。理科をやること、それも天文学をやりたい決心であった。3年1学期の成績は理科甲類で2番であった。卒業後の計画を村上先生に伺ってみたら「天文学をやるにしても物理学が基礎になるから物理をやってみたら」ということであった。こうして私は東大の物理学科を志望したわけであるが、その年の物理学科は募集定員30名に対して志願者は38名、さほど狭い門でもなかった。

#### 4. 東大理学部物理学科1年生

いよいよ大学生としての生活が始まる。下宿は教室から歩いて20分位の駒込蓬萊町にあって、昼食は下宿に帰って食べた。

大学の講義は中村清二先生の物理実験学、田丸卓郎先生の力学、坂井英太郎先生の微分積分学など、今から考えるとすばらしいものばかりであったが、余り勉強しなかったので物理学の根本が良くわからず今もって後悔している。3先生とも名講義をなされた。中村物理学がその数多い弟子達の間で評判であったことは、私が申すまでもない。先生は実験物理学の神様のようにいわれた。しかし先生の温容に対し、私は余り勉強をしたとはいえない。

大学の生活に少し馴れた頃、私はフランス語を学びにアテネフランセに通った。夜間で週2回、1年以上続いた。割合に勉強したのでフランス語は今でも英語に続いて楽に読み書きができる。

#### 5. 関東大震災のあとさき

その夏休みに兄の友人Yが帰省して不用心だからというので、代々木深町にあった彼の下宿で2週間ほど過した。その隣りは代々木練兵場で明治神宮はまだなかった。8月の中旬、故郷宮崎の父母や私を可愛がってくれた祖母に会うべく、この家を後にして九州に帰省した。

夏休みも終わりに近づいた9月1日、東京では何か大変な事があったらしいという噂が伝わってきた。当時は

ラジオやテレビがない時代で、実情はそう早くわからなかったが、これがすなわち9月1日の関東大震災であった。東京は目下ほとんど潰滅状態にあって混乱しているという。食料や住居の不足のため、地方からの上京者は差止められているとのことであった。しかし11月中旬にはついに上京した。大学の教室に駆けつけてみると、物理学教室は地震でヒビが入ってもう使えないとのことであった。中村先生と寺田寅彦先生とが震災中に起こった火事の性格や分布を研究され、同級生や上級生が助手をして街の焼跡を調べていた。

年が明けた1月15日には関東大地震の余震であろう、激震があった。震度は7位だったろう。その春2年生になると、私は本腰で勉強を始めた。長岡半太郎先生の電磁気学、光学には非常に魅力を感じた。私は高等学校の頃から講義の筆記や試験の答案などは全部英文で書くことにしていた。問題は大概英語で出されるので、答案も英文で書くのが当然と思っていた。長岡先生には可愛がっていただき、いろいろ御指導をかたじけのうした。先生は容貌魁偉、堂々たる偉丈夫で、割鐘のような声で講義をされた。講義は2年から3年いっぱい続いた。ある日先生に匹敵する風貌の外人の偉丈夫と並んで、他の諸先生を伴ってキャンパスを散歩しているお姿を遠望したことがあるが、この外人こそ空中窒素の固定でノーベル賞を受け、海水から黄金を回収し、ドイツの戦債を1人で支払おうとしたドイツの大化学者フリッツ・ハーバーその人であったと聞いた。

#### 6. 中国へ旅する

2年の終わり頃から私はなぜか中華民国にここがれて、大陸旅行の計画をたてた。大正14年3月、郵船「長崎丸」の3等船客となり、神戸を出帆上海に向かった。長崎を出たのは10時頃であったろうか、東シナ海を渡り早朝揚子江河口に近づくと、すでに海水は泥で褐色に変わっていた。昼過ぎに上海の埠頭に上陸した。イギリスの税関吏が入国の際私達をオーバーの上から手で触って身体検査をしたが、大変感じが悪かった。上海では東亜同文書院の寄宿舎に無料で寝起きしたが、朝食はフランスパンを買ってきて白砂糖をかけて食べた。昼は市内見物に費したため外食だったが、夜は寄宿舎で大勢の学生達と一緒に食べて楽しかった。桃で名高い竜華が近く、陽春の上海郊外は中国の古書にみる桃源境を想い出させた。

上海滞在中見るべきものは江南の名所蘇州、杭州だろう。私は友人と杭州の見物に行った。その頃私は大学を

出てから海洋学をやろうなどとは夢にも思っていなかった。杭州に近く見られる有名なポーアという潮汐現象を見る機会を逃した。その後上海から青島、済南、そして黄河を汽車で渡って天津、北京と旅をした。北京の雄大さと美しさに魅せられ、いつか今一度この町を訪れようと思って帰って来たが、その願いも今日まで50年間実現できない。その後私は明の孝陵や十三陵を経て万里の長城の走る八達嶺を見物し、長城の上でライスカレーを食べサイダーを飲んだ。北京の城壁、双橋無電局等が霞の中にかすかに浮んでいた。さらに満州に入り、旅順の戦跡、大連等、それに奉天、安東県を経て帰国した。この旅行はおよそ40日にわたる無銭旅行であったが、大変思い出が深いものとなり、それ以来私の放浪癖が募り、現在に至るまで数十回の海外旅行の魁になった。

### 7. 中央気象台に就職

2年生頃から少しづつ勉強を始めたが、いつでも必要がなければ勉強はしない。1年生のときにはガスバーナーから出る青い炎を分光器で見た時現われる青い輝線の配列が規則正しいのに魅せられ、実験の時間には何もしないでこれを見て楽しんだ。実験はいっこう進まないの担当の高橋胖先生が「日高君の実験はいつも同じように途中までで止まっている」と独り言を言われたのをそれとなく耳にしたので、これは大変だと心を入替えて実験に精を出した。1年生で半分遊んでいたのに比べれば、よほど勉強するようになった。ところで、実験物理学というものは大変貴重なものではあるが、時間がかかって余程の人でなければ成果を得られないと悟った私は、理論物理学に進もうと決心した。もちろんその頃第一線にあった相対性や量子力学のような物理学は、とうてい私では追いつけない。やがて卒業が近づくと、中村先生のお部屋に伺って就職先を決めてもらうのであるが、「君はどうも余り勉強しないとみえて成績もよくない。とても第一線の理論物理学者にはなれそうもない。気象台長の岡田武松君が、この頃神戸の海洋気象台に観測船を作って乗り手を探しているという話だが、行ってみてはどうだ。」と言われるので、どうも余り気に入らないけれども、まあ贅言を言っても無駄だと思ったのでお引受けすることにした。

神戸に行くことになったけれども、もともと海洋気象台は中央気象台の傘下にあつて、人事の交流は比較的楽だったが、当時神戸にいた関口鯉吉先生が中央気象台に転任する予定のところ、定員が足りなくて今1年神戸に留まられるという話なので、私はその代わり中央気象台



写真 1 大正15年4月12日写す。満22歳6ヶ月。この年、東大理学部を卒業し、中央気象台に就職した。

で1年間に東京に過ごすことになった。したがって岡田、藤原両先生の御指導を直接受けることができたのである。東京では藤原先生は東大で気象学を聞いた恩師であるが、気象台の予報課長であったので、私は同じ年に東北大学を出た岡田先生の甥である岡田 群 司 君 と 2 人で、先生の部屋の廊下を隔てた筋向いに陣取った。岡田先生は私に「藤原君が使っていた木製のタンクがあるから、その水面に日本列島からアジアの東部にかけての模型を作り、フイゴで水面に風を送り海流の実験を試してみたまえ。」と言われた。また雨の温度を測る実験、それに寒暖2つの飽和蒸気を同量ずつ容器の中に入れておく場合に凝結する水の量を理論で計算する方法を出すように指示された。これらの実験や理論は神戸に行くまでの1年間に全部終わり岡田先生に提出したところ、先生は「この流れはこの辺でやはり曲がっていますね。」といろいろ有益な助言をいただいた。こうしているうちに楽しかった東京の1年が過ぎてしまい、昭和2年4月のはじめのある夜、私は知人同志達に送られて東京駅を出発、翌朝早く神戸駅に着いた。そして15年余りの神戸の

海洋気象台の官舎生活がここに始まるのである。

神戸の台長はやはり岡田先生であったが、先生が神戸に来られるのは2ヶ月に1度位で、普段は主席の堀口技師が台長代理を勤めておられた。海洋気象台は神戸の山手に点々として連なる幾つかの丘の1つ宇治野山の頂上にあつて、その中腹にこれを取巻くように官舎が並んでいた。私の官舎から3分位でオフィスに着ける。この点非常に便利であるが、運動不足に悩まざるを得なかつた。

## 8. 初航海

この頃竣工した観測船「春風丸」は総屯数125屯の小型船であったが、大変よく小じんまりとまとまっていた。エンジンはこの前年岡田、藤原両先生が欧州各国を回られたとき、ドイツのMAN (Maschinenfabrik Augsburg-Nürnberg) という会社から買ってこられた150馬力の陸上用ディーゼルエンジンであった。4月の末になるとこの船を動かすことになり、皆でいろいろと研究した。このMANのディーゼル機関は陸上用の設計であつたため、なかなか思うように動かなかつた。ついに日本代理店に来ていたドイツ人の技師を2人つれて来て2日間ほどいじりまわして、ようやく動くようになった。

乗組員はもう全部揃つていた。船長は村田丑彦さんで49歳の老練な航海者であつた。観測機械が揃つたところで、ある日岡田群司技師と私と、外に4、5名の観測者達と観測実習に出かけた。ところが大阪湾が大変荒れて、不馴れな上に船酔いが続出して手順がうまくゆかず、処女航海は大変なさわぎであつた。このような試験航海を何度か繰返した後、確信が持てるようになって、5月のはじめ1週間の予定で瀬戸内海の方々を訪問することになった。5月の瀬戸内海は大変穏やかであつた。昼は観測の稽古をして、夜は最寄の港に泊まるという日々であつた。

つぎは7、8月に播磨灘の観測をすることに決まつた。私が主任で計画をたてることになり、4回の航海を予定し、Aのチームが1週間出たは1週間休み、Bのチームがその間に出たはまた1週間休むというスケジュールであつた。この結果をまとめるのが一仕事で、約2ヶ月を要したと思う。この航海では夏季の播磨灘の各層の水溫、塩分、密度等の水平および鉛直分布をまとめた。また播磨灘の十数ヶ点でエクマン・メルツ流速計を用いて各層の潮流を測つた。最後に海上の気温を観測した。また水中の化学成分、すなわち溶在酸素、水素イオン濃

度、その他の諸性質にはまだ手が届かなかつた。

昭和4年の春には東京湾の観測航海に出た。その際東京に2週間以上滞在したように思っている。私はその間にある女性と見合いをして結婚することになった。しかしその結婚は長く続かず、確か半年位で不首尾に終わった。その後間もなく昭和6年、須田皖次御夫妻の媒妁で2度目の結婚生活に入った。淡々として水の如く別に可もなく不可もないという結婚生活であつた。昭和10年10月24日長女が東京の実家で生れた。母子が神戸に帰つて来たのは昭和11年3月であつた。

## 9. 学位と帝国学士院賞を受ける

昭和8年5月19日、私は東京帝国大学から理学博士の学位を受けた。時に29歳6ヶ月であつた。そして同じ論文に対して翌9年5月帝国学士院から東日、大毎寄付「東宮御成婚記念賞」を受けた。この頃の私は学問への情熱が全身にみなぎっていたようである。受賞の対象となつた論文は学位論文と同様海や湖の水の振動の力学的研究と海流理論とであつた。以来50年近く私は終始一貫今もつてこの問題と取組んでいる。

学士院賞の受賞式は近親者の同席で行なわれるのが慣例で、妻もその両親も出席した。帝国学士院長は桜井錠二先生で、私への接待役は寺田寅彦先生であつた。岡田先生も学士院会員として同席され、また堀口先生もわざわざ神戸から駆けつけて出席された。斉藤実総理大臣が私の参考品が陳列してある部屋に寄つて来られ、私の数式のぎっしり詰まつた論文を見て「つまり海流の問題ですな」と話しかけられたのを覚えている。本多光太郎先生は、私と同じ湖海の振動について御研究なすつた方であるが、「この頃こういった問題も難かしくなつたものだな」と後で岡田先生にいわれたと同先生から聞いた。

従来学士院賞受賞者は、学士院会員、それに総理大臣他政府首脳部と共に、宮中で賜餐がある慣例であるが、今回は陛下の御名代として閑院宮殿下、それに斉藤総理、枢密院議長一木喜徳郎以下の御歴々が列席され、私ども7人の受賞者は末席に連なつて御馳走をいただいた。賜餐の前に姉崎正治先生が受賞者を1名づつ閑院宮殿下に紹介されると「研究にはいろいろ苦勞があつたでしょうな」というお言葉を頂戴した。

この他、受賞者は式後前田利為侯爵邸で夜食の御馳走をいただくのが慣例であつた。受賞者が7名、それに加賀出身の帝国学士院会員が4、5名出席、目黒に新築された侯爵邸で御夫妻と御一家を囲む会食であつた。当時の侯爵家というものゝ威勢は、現在では説明の仕様がな

いほど庶民とは桁外れたものであったので、私の緊張も並一様ではなかった。その夜桜井院長は私どもを代表して侯爵に謝辞を述べられた。確か侯爵は陸軍少将の軍服を着ておられたが、大そう愛想よく、私に「日高さん、黒潮とはあれはどんなのですか。船に乗る毎に私は不思議に思うんですがね。」と気楽に質問されたのを覚えている。この豪華な建物は戦後リッジウェイ大将が住んでいたが、現在は都に寄贈されている。私は4年ほど前に侯爵末亡人の御案内で一度拝見したことがある。

この時私は31歳、前年受賞した菊池正士君に次ぐ若い受賞者であった。

### 10. 野満先生と壺井伊八さん

私が京都大学の野満隆治先生と海洋気象台の学術雑誌「海と空」で盛んに論戦を交えていたのはこの頃であった。先生は年齢すでに60歳に近かったが、きわめて活発に海流、津波、それに海水の振動等の理論を京大理学部紀要に発表された。また私の論文の不備を指摘されたこともある。私も若気の至りで全力を挙げて先生に対して論陣を張り、よく失礼なことを申し上げたものである。ある日先生は京大総長であった東洋史の羽田享先生と2人で海洋気象台を訪問された。野満先生はおかしくてたまらないような笑いを浮かべて「日高さん、もうあの位でやめましょうや。」と言われた。私もひどく恐縮してその後再び先生と論争をしなかった。

昭和9年4月、海洋気象台に壺井伊八なる若手の秀才が就職してきた。三高、東大の出身でまじめな、しかも頭の切れる人であった。明治45年神戸の生まれで、当時22歳位、毎日黙々として地下室で気象測器の検定をやっていた。よくできる人なので、私のように勉強しないで必要に応じて教科書を読む人間とは違って、私は物理や数学がわからない時には地下室に降りて壺井さんに聞いたものである。彼はやおら向直って、徐々に口を開いて意見を述べてくれた。彼は私の仕事にも大変興味を持ち、自分でも湖海の振動、津波、海の波などの論文を書いた。いずれも数学の遊びみたいなものではない。実用価値の高いものが多かった。昭和10年のはじめから彼は胸の病で健康がすぐれなかった。それでも良く研究に精進し、多くの論文を書いた。昭和11年出勤をやめた。翌年3月小康を得て再び出勤、大阪管区気象台にできた災害科学研究所の兼任を拝命した。しかし同12年9月10日、突然咯血して10月29日不帰の客となった。

私はなぜかこの人を忘れることができない。日華事変が始まったこの年、神戸の下町のレストランの庭で彼と

ビールを飲んでいてある初夏の宵を思い出す。拡声器はいっせいに軍歌や愛国歌をガンガン放送して国民の軍国意識を煽った。壺井さんは私と差向かいでテーブルを囲み、ニコニコしながら学問の話に花を咲かせた。彼の研究は昭和9年3月から11年2月まで主として僅か2ケ年の間になされたものであるが、それでも28編の論文がある。うち2編は英文で、特に「平滑なる周辺を持ち細長からざる湖水の自由振動」という論文はすぐれている。彼逝いて40年余、歲月いたずらに流れ、私も馬齢を重ねたが、彼と送った楽しかった歳月を忘れることができない。いまや君はむなしく白玉楼中の客となって再び帰らない。冥福を祈る。

### 11. 海に学ぶ

この間私はしだいに海に親しむようになった。海上生活はすでに1,000日以上に達していた。陸上で仕事をする暇が少ないので、英文タイプライターを碇泊中の船に持込んで論文を書きまくっていた。小船であったため、原則として夕方は港に入り翌朝出帆したし、港湾の潮流観測などのときはかなり暇もあった。この頃私の友人たちは、「日高は逆巻く波の間に間に論文を書くそうな」と評したが、その実情は以上の次第であった。

しかし恐ろしい体験もあった。「もうお陀仏だ」と観念したことが3度あった。だいたい春風丸はどちらかといえば「トップ・ヘビー」のよく揺れる船だったが、1度は日向灘で、1度は遠州灘、そして今1度は日本海を雄基から能登半島へ横断した際、七尾に4,50海里という地点であった。勝手なもので、このような危険状態に直面すると、船酔いなぞたちまちどこかにスッ飛んでしまうのであった。

しかし昭和15年頃の私の生活は充実し、ようやく海の研究に一生を捧げる気持になっていた。そして海が好きだった。研究のテーマが出て来ないときは次の航海を待たせて船に乗った。そして甲板の手摺にもたれてジーンと海面を睨んで冥想に耽っていると、自然によい着想が浮かんでくるのであった。私はこのようにして海に親しみかつ学んだ。

このようにして海洋観測に十何年かを捧げたが、その結果はすべて邦文で「海洋時報」と称する膨大な報告書で発表された。これは須田先生にとっても私にとっても大変な仕事であった。寺田寅彦先生から「彼等は馬車馬のように働いている」との御批評をたまわった。海洋時報の英訳本は Journal of Oceanography である。



## 12. 海洋観測法の成立まで

このような多くの海上生活から、私たちは私たちなりの観測法を作り上げてきたが、他の官庁や学校等でもそれぞれ独自の流儀で研究を続けていて、相互間の意思の疎通にやや欠けるところが見られた。そこで昭和10年の秋頃から共通の観測法の制定というか、つまり“定め”をつくる必要を感じ始めた。

このころすでに須田先生は神戸におられなかったで、海洋物理学の部門は私が、化学、生物に関する部分は松平康男さんが書くことになった。また海の表面の満干をはかる潮汐観測は東京の関口鯉吉先生（後の東京天文台長）に書いていただいた。その他に東京の気象台には三宅泰雄さんがやはり化学の専門家、海洋化学の研究に熱意を持っておられると聞いたので、私たちの草案をもって、堀口先生、松平さんと共に上京し、岡田、藤原両先生はじめ専門家の諸氏と検討し合う会が開かれた。

このために何度か東京神戸間を往復したが、苦勞の甲斐があって、昭和11年3月出版の運びとなった。紙数250頁、別冊として海洋観測常用表を付し、実用の便に資した。売捌所は海洋気象台内海洋学会であったが、多くの人に重宝していただき、私にとって嬉しい仕事となった。ときどき改訂し何回か版を重ねたが、この最初の「海洋観測法」もだんだん古くなって、あちこちに訂正を要する箇所が出て来た。しかし、その改訂も戦争のためなかなか実現せず、何年かが空白のうちに過ぎていった。戦後昭和20年、中央気象台の若い研究者たちの手によって、全面的に修正が加えられ、名称も「海洋観測指針」と改められ、日本海洋学会から発行発売されることになり、現在に及んでいる。内容は、実際の海洋観測の方法を詳しく述べ、それに用いる数表が載っていて非常に親切にできている。この表に関しては、もともと欧州には1900年頃デンマークの海洋学者クヌーツセンその他が編纂した「クヌーツセンの表」というものがあって広く各国に用いられているが、日本でも大日本水産会が古くからある程度翻刻して、「海洋調査常用表」として出していたものである。海洋観測常用表と大体同じであるが、新しいだけに後者は表の数も多い。この表を用いれば、たやすく海洋観測の結果を整理して研究に使える形にすることができる。

## 13. 皆既日食の観測と北洋の海水探検

昭和11年6月19日、北海道で皆既日食があった。日本におけるその中心は利尻島の西に始まり上斜里、女満別等を通じた。諸外国からも多くの探検隊が北海道に乗

込み、マスコミは日食関係の科学的ニュースで賑わったが、日本の花形役者はもちろん東京天文台長関口鯉吉先生で、新聞人の追跡を避けるために「北見行雄」なる変名で寝台券を買われたという。先生の観測地点は北見の辺にあってからである。素人に近い私が日食に参加しても大した貢献にはならないが、敢えて出掛けたのは、北海道の本島には観測点が網の目のように分布しているが、もし天候が悪かったならば北海道は全体として曇るか雨で全観測網はことごとく失敗に帰する。利尻島は北海道からかなり西に位置しているの、気象状態も異なるであろうから、本島が悪天候でも利尻は晴れることもあり得る、といった勝手な理屈を掲げて関口天文台長を訪ねた。先生は「僕が英国から持って帰った天体カメラがあるからそれを使いまえ。赤道儀は付いていないがレンズが明るいから露出時間はフィルターをかけても数秒でいい。したがって皆既中に何枚か露出ができるだろう。クロノメータを持って行って食の時刻を読んでもらえば僕らも大いに助かる。是非やりましたまえ。」と激励して下さったので、大いに気をよくして神戸に帰って天体写真儀を船に積込んだ。クック製径4吋、焦点距離70㎜のトリプレットで明るさはF/6.8だった。時刻決定のためにクロノメータを数台持って行った。感光材料としてはアグファのイゾクローム乾板をアグファのローゼナル現像液を水で20倍に薄め、摂氏19度で10分間処理することに決めた。

その年の6月初旬、仙台で水産関係の会議があったので出席し、6月8日瀬戸内海から日本海に出て北に向かっていた春風丸に秋田県の船川港で乗船して利尻島に向かった。観測は現在の精度に比べると大変なものであったろう。しかし当時にしては精一杯の努力であった。くわうるに関口隊をはじめ各国の観測隊は悪天候のため枕を並べて失敗したのに対し、利尻島は稀に見る快晴に恵まれた点、何かのお役に立てたと思った。観測終了の翌日6月20日春風丸を稚内に回航して1泊、翌日北大の中谷研究室で乾板の現像を済ました後、札幌のホテルで岡田武松先生が同じホテルの、しかも私の部屋の向かいの部屋に泊まっておられるのを耳にし、翌朝御挨拶に伺った。何でも中谷さんが気象学の講義をしていただくため、1週間位の子定で引っぱったのであるとのことであった。

翌日北大の講義室で中谷さん、茅さんはじめ多数に交わって岡田先生の大変素晴らしい講義を拝聴することができた。このように北大で中央の大家を招いて活発な交流

が行なわれたのは、やはり中谷さんの優れた政治力によるものといえよう。

その後十和田湖の調査に2週間を費した後東京に戻った。東京では帝国学士院長兼学術研究会議会長桜井先生の名前で、今日の日食観測に関係した内外観測隊の幹部を一ツ橋の学士会館に招いて歓迎会が開かれた。岡田、関口両先生も出席されたが、私も末席をけがすことになった。席上桜井先生は十余年に及ぶ英国留学で身につけられたまことに流暢な英語で、冗談と笑顔を交えながら歓迎の挨拶をされた。その弁舌爽やかなのは英国隊のストラットン教授も舌をまいて驚いていたということである。

昭和14年の2月、私は宇田道隆博士と水路部の要求で、水路部第2部長岸人三郎大佐その他写真班やら海図係の人たちと共に、軍艦「大泊」に乗って、日本海北部からオホーツク海、カムチャッカ半島周辺の氷の調査に出掛けた。2回の航海で、第1回は2月から3月、第2回は4月から5月にかけて各々1ヶ月くらい冬の氷海を回って歩いた。この調査の成果として海氷の分類および術語の制定を行なったことを挙げる事ができよう。艦長は門前鼎大佐で、岸人大佐と2人で毎夜1升瓶を1本ずつ平げていた。2月の悪天候の中を青森県大湊を出帆したが、物凄く揺れるので、宇田さんと私は大部屋でリングしか口に入らずにおおむね寝て暮らすこと3日、そこに岸人大佐が入って来て「貴様らはいつまで寝ているんだ。オイ、起きて甲板に出て来んか。」と冷やかすので、それではと甲板に出てみると門前艦長がぼんやりと立っている。「ここはどの辺ですか。」と聞くと「なにあに、まだ津軽海峡の入口ですよ。この時化では船は進みませんよ。」という答でガッカリした。しかし、翌日は沿海州側の氷原に入ると見えて艦は揺れなくなった。いわゆる「蓮葉氷」が限りなく続く海原を眺めて、大自然のスケールの大きさに魅了されたのであった。その後「大泊」は間宮海峡に入り、北緯50度を越えた。越えて4月、宇田さんと私とは再び小樽で「大泊」に乗込んでオホーツク海に入り、千島、カムチャッカの西岸を北上しつつ北緯60度のオホーツクという町の沖合まで行った。

#### 14. 初 渡 米

氷の観測に出掛ける直前、私は昭和14年夏米国で開かれる第6回太平洋学術会議の代表に自分が選ばれていることを知った。その裏話として、岡田先生が神戸に来られて「この前代表を選ぶ会議があってネ、京大の野満君と君とが候補にあがったが、僕は日高の方が磯臭いとい

ったら君に決まったよ。」といわれた。その頃私どもの1級上まで位の人たちはたいてい外国生活を経験していたが、現在は国際情勢が相当緊迫しているために政府は学者をなるべく外国に出さない方針をとっていたのだが、私はこのチャンスを大変貴重な機会であると思った。

同行は団長として東北大学教授畑井新喜司先生、京大の松山基範先生、それに地球物理の坪井忠二博士と私の計4人であった。開戦の2年余り前の話で、それでも当時の日本の経済が許す最大の代表団だということであった。私は昭和14年7月6日午後3時横浜を解纜した郵船の豪華船竜田丸の1等船客となって出発した。畑井先生に坪井君と私とはサンフランシスコ、スタンフォードおよびロスアンゼルスで開かれた第6回太平洋学術会議の代表、そして松山先生、坪井君に私とは9月からワシントンで開催される測地学および地球物理学協会第8回総会の代表を兼ねた。この豪華船のサービスの良さはおそらく今でも他に余りないと思う。11日の夕刻船は国際日付変更線を越える時、汽笛を吹鳴らし、全船の客にそれを知らせた。したがって翌日も7月11日である。船長はむずかしい英語の文句を書いた長寿の証書<sup>ロンジビティ・ギャランティ</sup>を各船客に配り、寿命が1日延びたことを祝福した。

7月14日の朝、船は太平洋の常夏の島ハワイのホノルルに入港。私たちは1日をこの魅力溢れる島に過ごした。フラダンス、椰子の木の下でのかがり火、ポリネシアの青年や乙女達……、私は夢のような気持ちになり、この強い熱帯の印象を刻んで、その夜12時ホノルルを後にサンフランシスコに向かった。

サンフランシスコでは私どもはまず全員ヤマト・ホテルに数日泊まり、後パークレーの加州大学構内の男性寄宿舎「ボウルズ・ホール」に移った。

第6回太平洋学術会議はパークレーの加州大学のフィラー・ホールで発会式があり、日本の主席代表として畑井先生の挨拶があった。この宿舎は大変設備が良く何ら不自由がなかった。地震学のグーテンベルク、重力のベニング・マイネス等が泊まっていた。25日、会場に続いた休憩室に行ってみると、加州の南ラホヤにあるスクリプス海洋学研究所長スヴェルズルプ、フレミング、それにワシントン大学海洋学教室のタンブソン等、主として太平洋岸の人たちが私を歓待してくれた。皆文通や論文の交換で親しい人たちであったが、膝を交えて話合ったのははじめてであった。

私は宇田さんと2人で書いた論文「日本の海洋研究の現状(英文)」を紹介し、また藤原咲平先生の「日本に

おける気象学研究の現状(英文)」という報告を読んだ。またスヴェルズルプから座長を勤めるようすすめられて閉口したが、何とか役を果たすことができた。

パークレー・ヨットハーバーにはワシントン大学の観測船「キャタリスト」が展示されていたが、この船を回航して来たグットマンという青年学者は、私に「君はいつもすごい論文を書けね、僕にはわからない。」と語った。この船を訪問中、フィリピンの水産学者ヴィヤドリドと知合い、以来親交を続けて来ている。(昭和41年東京で開催された第11回太平洋学術会議では、彼は日本側で制定された「畑井メダル」の第1回の受賞者たる光栄をになった。)

会議の後半分はパロ・アルトにあるスタンフォード大学で行なわれた。おそらく全米一〇世界一美しい大学であろう。代表者たちは「ラグニタ・コート」という女学生の寄宿舎に泊められたが、その設備と庭園の美しさは目をみはらさずにはいらなかった。会議が済んでからスヴェルズルプが「これからラホヤに帰る。いつ来てくれる。」というので日を約して別れた。

やがて私は松山先生と一緒にスクリプス海洋学研究所を訪れ所長のスヴェルズルプ、マキウワン、モーバーク、フレミング、ライマン等から歓迎を受けた。またずっと後で聞いた話だが、ムンクは当時大学院の学生で、この研究所にいたという。彼は数年前「あなたが来られた時のことを良く覚えていますよ。」と語った。その夜はスヴェルズルプと食事をした後で、また研究所へ行って、8時頃までつたない英語で話して別れた。彼が私を宿舍に送ってくれた車中から仰いだ南加の澄み切った星空は今もって忘れない。

第6回太平洋学術会議を済ました私は、8月いっぱいをもたサンフランシスコで過ごし、シアトルのワシントン大学海洋研究所、ユタ州の大鹹湖<sup>グレート・ソールトレーク</sup>、シカゴ、ワシントン、ニューヨーク、それにボストンを訪れた。9月になってワシントンで国際測地学および地球物理学連合の第8回総会が開かれたが、運悪く9月1日英国がドイツに宣戦を布告したので、米国もその余波を免れなかった。シカゴから汽車でワシントンに向かう途中、展望車の中で味わう初秋の爽やかな空気も、戦争のことを考えると憂鬱で楽しくなかった。

開会式の朝、休憩室で松山先生が「あそこにエクマン先生がおられる」といわれるのでその方向を見ると、長身瘦軀に白い顎鬚をたたえ、ソファーにかけて静かに新聞を読んでいる老紳士こそ、かの有名な海流理論を導び

いた碩学エクマンその人であった。私は彼が新聞から目を離れたのを見計らって挨拶に行った。彼は私の名前を知っていて、柔和な顔で挨拶を返したが、北欧人の常として多くを語らなかった。当時70歳位であったろうか。

エクマンの他に北欧からは、北洋の海洋観測に一生を捧げたヘランハンセン、塩素定量の創始者マルティン・クヌーツセン、デンマークの海洋物理学者ヤコブセン、英国の潮汐研究者ブラウドマン、同じくツッツソン、地球物理学のハロルド・ゼフリース、若手ではノルウェーのモスピー等が来ていた。ブラウドマンは「ドイツの連中は戦争が始まったので誰も来ない。何人かは来たんだけども皆呼び返されたよ。」と私に語った。

この学会で私は「実体写真による海の波の研究」を報告した。この研究は十余年前すでにドイツ大西洋探検でシェーマッヘル等が試みたものであるが、これを太平洋でやるのも無駄ではないと思って試みたものである。

昭和9年9月21日、室戸岬に上陸し京阪神を襲った「室戸台風」は、同地方に未曾有の惨害をもたらした。私はその朝、台風の目が神戸を通過したのを身を以て体験した。その後数ヶ月、私たち地球物理学関係者は、この台風の性格を追究し、災害の防止のために阪神の海岸を奔走した。その翌年日本学術振興会の理事長・長岡半太郎先生が岡田武松先生と相談して「災害研究委員会」を発足させることとなり、私もその委員の1人に任命された。研究のテーマは特に決まっていなかったので、私は海の波の研究がしたい旨申出て御許しを得た。これは実体写真またはステレオ写真といって、一定距離に置いた2個のカメラを同じ方向に向けて同じ海面を写し、その2枚の写真から機械で波浪の形態を読みとり、それから波の高さ、波長、その他の海の波の諸要素を導くのを目的とする。小西六で6米離れた2台の写真機を支える支柱を作った。レンズはツアアイスからCテッサーF/4.5 210耗を2つ取寄せ、電気仕掛けで両方を同時に露出できるようにした。近海でテストを繰返した後確信が持てたので、渡米を機会に北太平洋の荒波を測定しようということになった。

このような経緯で昭和14年10月末米国から帰る途中、ロスアンゼルスから大阪商船の貨物船東海丸(7,000吨)の客となり、アラスカ湾の波浪資料を得ることができた。

#### 15. 太平洋学術会議について

太平洋学術会議の沿革は1920年8月2日に溯る。太平洋の十字路といわれるハワイのホノルルで第1回汎太平洋学術会議が、太平洋の学術に関心を持つ9ヶ国の科学

者93名が集まって開かれた。この会議に日本から参加した人々は、団長に桜井錠二、地震学の権威大森房吉、他計4名であるが、会議の分野は人類学、地震学、生物学、地質学、地理学、および火山学等に分かれていた。そして各国を代表して議事の整理や出版することを、ホノルルにあるビショップ博物館が委嘱されて行ない、また各国代表から1名ずつ選んで将来の会議の準備・計画を進めることになった。これが現在の太平洋学術協会および太平洋学術理事会に発展するのである。

第3回会議は桜井錠二先生を会長として1926年に東京で開かれたが、桜井先生の提案で、汎太平洋の「汎」は不必要であろうということで、次の第4回から単に「太平洋学術会議」と称することになった。この会議で桜井先生を委員長とする国際機関委員会ができて、会則と細則とを修正の上採択したが、この意味で桜井博士の功績は非常に大きいというべきであろう。

憲法によれば、太平洋学術協会の基本目的は、太平洋地域に関する、特に太平洋諸民族の繁栄と福祉に寄与する各般の学術的諸問題の研究に協力・提案・促進せしめ、太平洋諸地域の科学者間に同胞感を深めることにより、太平洋諸民族間に平和の絆を強化することにある。また理事会は各理事国（現在25ヶ国以下）から1名ずつ計25名未満からなり、協会の運営を司る。

1930年第4回会議では日本から五十数名の代表が出席し、会議の規模がしだいに大きくなるのが予想された。そこで畑井先生を委員長とする各国の公式代表数の比率を査定する委員会が結成され、先生はこの大変な難事業をみごと解決された。その主なものは、日本15、米国25、カナダ20、英・豪等5であった。この比率は1961年第10回ホノルル会議でごく些細な改訂が加えられ、日本15、米国25、カナダ10となるまで全く変更されていない。

最初の日本からの理事は、当時の東北大学教授畑井新喜司先生であったが、その後戦争に入りしばらくは空白であり、戦後再発足してからの日本選出理事に日高孝次が就任することになった。

実のところ、私は太平洋学術会議に大した興味を持っていたわけではないが、大学卒業の年東京で開かれた第3回会議に足を運んで以来、第4回が蘭印で、第5回がカナダでといった具合に行なわれる度に、しだいに関心が深まっていった。「太平洋」という文字が、私にとって大変魅力的なひびきをもっていたことは確かであった。

終戦の後、占領時代も過ぎた昭和28年、はじめて日本

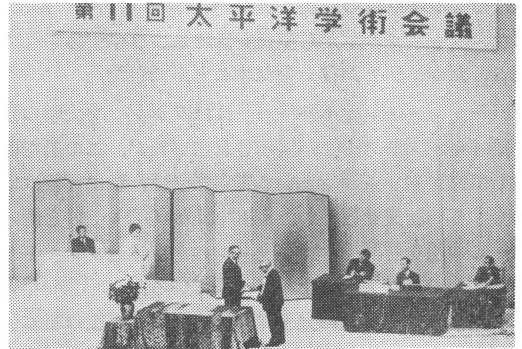


写真2 1966年8月22日、第11回太平洋学術会議の開会式で、太平洋学術協会の名誉終身会員に推された。議長は朝永振一郎氏。

の代表が第8回のマニラ会議（1953）に出席することが承認された。このようにして再び日本が参加できた太平洋学術会議は、第9回バンコック（1957）、第10回ホノルル（1961）で開かれていった。この第10回ホノルル会議で理事会に出席した私は、そろそろ日本が豪州で開いたらという周回の声があったので、つぎの第11回の会議を1966年日本で開催することを引受けて帰国した次第であった。

このような経緯で私と太平洋学術会議とは非常に強い結びつきになったのであるが、長い間会議に出席し、かつ理事を勤めた期間も長いので、外国に友人が多くなり、後年いろいろな意味での交友が続き、そのために公私ともに助けられたことが多かったのを感謝している。

日本での第11回会議は、すでに御承知の方も多いと思うが、参加68ヶ国、参加者6,096名（うち日本代表3,936名）を以て8月22日から9月10日にわたって行なわれた。22日午前日本武道館で開会式があり、名誉総裁皇太子殿下、同妃殿下御臨席のもとで、ハワイのペンバートン博士と私とが太平洋学術協会の名誉終身会員に推されたのは、身に余る光栄であった。また畑井賞牌がフィリピンのヴィヤドリド、グレゴリー賞牌が米国のマードック両博士に贈られた。

昭和26年から27年にかけて、私は家族と共にテキサス農工大学に招かれて約1年間滞在した。しかし27年11月第8回太平洋学術会議がマニラで開かれるので帰国し、その代表二十数名の団長としてフィリピンに向かった。対日感情は余り良くなかったけれども、会議の会長であったフィリピン大学総長のタン博士は非常に気を使ってくれ、公式には何ら不快な目に遇わずに無事大役を果た

すことができた。開会の挨拶に当たり、私は壇上から正面・左・右と3回お辞儀をしてから挨拶に入り、「日本の責任において起こった政治的紛争のために、本会議の開催が10年間遅れたことを深くお詫びします。」と結んだところ、満場とくにフィリピンの学生の間から割れるような拍手が起こった。私はいったい何が起こったのだろうと狐につままれた感じで茫然として壇上を去った。当時の米国の太平洋学術庁のクーリッジ博士が後で「日高さんは大変な外交官だ。あの3回のお辞儀でフィリピンの対日感情が一度に好転してしまった。私も貴下が壇上に上がるまでは何か不穏な事件が起こるのではないかと大変心配していたのだが……。」とよく述べたものである。

当時のフィリピンでは「日本なんかを会議に入れるのは反対だ」という意見が強かったほどであったとクーリッジさんから聞いたが、私はその種の事はあまり気かけないで出席したので、後で聞いて驚いた次第であった。その裏話としては、クーリッジさんが「日本では多くの代表を送ることが難かしいだろうから」とロックフェラー財団から2,000ドルの金をもらってこっそり私に手渡してくれたが、「これがフィリピンに知れたら大変だから気をつけなさい。」と、ある米国の若い人類学者に托し、マニラの裏町の家陰に私を引きずり込み札束を渡してくれたというひとこまもあった。この2,000ドルは日本代表で旅費の乏しかった人々に分配したことは申すまでもない。

昭和32年にはバンコックで第9回会議が開かれたが、この会議で感じたことの1つは、常置委員会が18もあったのに、日本人で委員長に選ばれた人が1人もいなかったことである。はなはだ残念に思って、つぎの開催国の選定会議の時に「日本人からも委員長を出して欲しい」と発言すると、豪州代表が立上って「君はそういうけれども、日本はこれまで外国とどんな協力をしているかね。戦前は支那大陸をつまみ食いしていたのではないか。だいいち英語を喋れる人間がろくにいないじゃないか。国際事務だって上手にはできないだろう。」と手きびしい反論で立向かってきた。そこで私は「君は英語、英語というが、君たちは生まれながら英語を話す国民だが、我々は英語を話さない国に生まれただけではないか。この会議は学術の会議で英語の会議ではないはずだ。」といと、彼は得たりとばかり「しかし、憲法によれば太平洋学術会議の用語は英語だからな。」ときめつけてきた。憲法を楯にとられてはとてまかなわないので、恨みを飲

んで引下がったという情けない一幕もあった。

しかし、この論戦の結果日本の面子を立てるということもあってか、次回の水産常置委員会の委員長には英語の上手な黒沼勝造さんが良いということになったが、4年後のホノルル大会ではこの日本人委員長が立派にその職責を全うしたのはもちろんである。この経験をきっかけとして、日本人の常置委員会の委員長は毎回3、4名現われるようになり、日本学術の実力がしだいに認められてきたことは大変うれしいことである。

#### 16. 日本海洋学会の創立

私が神戸に赴任する以前から、海洋気象台およびその建物の一部をなす神戸測候所の職員たちが、研究論文を発表する機関として「時習会」なるものがあって、機関誌「海と空」を毎月刊行していた。また海洋気象台および神戸測候所員の厚生機関として「厚信会」があり、その行事の主なものとして春秋2回、京阪神の近郊に日帰りの遠足を楽しんだものである。それだけならば問題はなかったのであるが、その遠足の費用の一部が、雑誌「海と空」の売上げで賄われているという事実があった。私が神戸に行って何年かして「海と空」の編集をやるようになると、よく神戸以外の読者から「神戸の連中の酒代を出すなんて」という文句をしばしば耳にした。岡田、堀口両先生もこの事情を心配しておられたに違いない。昭和5年会名が「海洋学会」と改められた。

いっぽう東京では昭和7年頃から宇田道隆さんが主力となって、海洋研究者の横の連絡機関である「海洋学談話会」が結成され、月2回木曜の夜会合してお互いの向上に資していたが、昭和11年2月16日その第100回の会合に際し、宇田さんは水路部の重松良一大佐らと語り、この会を発展的に解消して全国的な「日本海洋学会」を起こすべしとなし、岡田光世氏などと共に時の中央気象台長岡田武松先生を熱心に説いた。そこで岡田先生は堀口先生や私と相談されたが、前記のごとく当時「時習会」の複雑な事情がからんで具体化に至らず、停頓の形で昭和15年を迎えた。

昭和15年12月、私は大局的に考えて是非全国的な日本海洋学会を創立する必要を認めるに至ったが、宇田道隆、三宅泰雄、その他東京の同志たちも期せずしてその創立を支持するに至り、昭和16年1月14日、銀座ユニオン・クラブに岡田光世、伊東孝一、宇田道隆、三宅泰雄、末広恭雄、稲葉伝三郎、新野弘、福富孝治、桑原新、吉村信吉、丸田頼三および日高孝次が出席して日本海洋学会準備委員会が開かれ、私、日高孝次の名におい

て、1月28日一ツ橋如水会館で日本海洋学会の発会式をあげる由を伝え、参集を要求する招請状が発送された。ついで1月18日宇田、岡田(光)、三宅3氏が、学士会で会則原案、役員候補について協議した。さらに1月25日には中央气象台の中村記念館で最後の打合わせを行ない、岡田光世さんが会則の原案を起草、出版は地人書院の上条勇氏が引受けることとなった。

昭和16年1月26日午後7時、一ツ橋如水会館に発起人会兼創立総会を開いた。全国からはせ参じた同志40名、まず発起人代表東大教授伊東孝一先生の挨拶があった。私は座長に推されたので席につき会則審議に移ったが、大体原案通り可決、ついで藤原咲平先生の動議により、当日の出席者全員を評議員に推した。つづいて選挙の結果岡田武松先生を会長に戴くことに決定した。その後各幹事等が相次いで決められ、ここに「日本海洋学会」が正式に発足することになったのである。進行係の私は、この時1つの失敗を犯してしまった。会長に岡田先生が決まったのだから、当然、会長就任の御挨拶をお願いしなければならなかったのだが、私がぼんやりしていると、先生は1人で勝手に壇上に昇ってゆかれて話を始められた。私は自分の迂闊さに大変赤面したことを覚えている。(これらの経緯は、昭和36年学会創立20周年記念大会に出版された「日本海洋学会20年の歩み」に詳しい。)

学会としての当面の仕事は「日本海洋学会誌」という専門雑誌を発行すること、あわせて月刊の通俗啓蒙誌「海洋の科学」を毎月発行することであった。編集委員はなかなか多忙で、私も10人位の同志と毎月1回方々の食堂を借りては「海洋の科学」の編集方針を議論したものである。「海洋の科学」の名付け親は、現油壺マリン・パーク水族館長の末広泰雄さんで、大変良い名であると好評だったことを付記しておこう。この雑誌は当時購読者約800人で、2,000人を目標として努力を続けたものである。しかし空襲が重なるにつれて出版はしだいに困難となり、昭和19年末第4巻第12号を以て休刊の止むなきに至った。いっぽう「学会誌」の方は月刊でないもので、それほど苦しくはなかったが、それでも空襲疎開等のため、用紙割当、編集、発行等意のごとくならず、昭和20年春頃に一応中断することになった。このようにして、「日本海洋学会」の活動は、空襲が激しくなるにつれてしだいに低調となり、ついには自動的に機能を停止する破目に陥った。

昭和23年5月29日、月島の水産試験場で「日本海洋学

会」の総会が戦後はじめて再開された。この時に岡田武松先生が辞意を表明され、選挙の結果、私、日高孝次が2代目の会長に選出された。それ以後、私は昭和42年辞任するまで19年の長きにわたって会長の職に止まることになるのである。

昭和36年10月鳥居坂の国際文化会館で「日本海洋学会」創立20周年記念祝典および大会を開くことになり、気象庁の寺田一彦博士が大会委員長で、国際シンポジウムも同時に開かれ、外国からも著名な学者が7、8名参加した。その後椿山荘でリセプション・パーティーが賑やかに取り行なわれた。米国テキサス農工大学海洋研究所のリーバー博士は、「海洋学会は米国にはない、すでに20年も前にこれを創立した日本の海洋学者たちに敬意を表すると共に、帰国の上は米国でもこれを創立すべく努力したい。」との感想を述べた。

この祝典からこのかた日本海洋学会にはさほどの変化はないが、沿岸海洋部会を設けることとか、日本学術会議からの依頼で将来計画小委員会をスタートさせるなどをはじめ、小グループに分かれてかなりめばしい活動が開始されることになる。また例年春秋2回の大会をもつことになり、今日に及んでいる。

昭和42年の春、私の会長任期が終わって京都大学名誉教授・東海大学海洋学部長の故速水頌一郎さんが新しい学会長に就任することになった。それまでは会長の任期は1年で、何回でも留任を妨げない規則であったので、それまで私が情性的に毎年当選していたのである。時には私自身が外国に行っている間の選挙でも当選するというので、これでは名誉職に等しいというので、会長の任期を2年に改め、しかも1回以上は留任を許さないということにし、会長の交替ということになったのである。

さて余談に外れてしまったが、このようにして進展してきた私たちの「日本海洋学会誌」は、最近においては主として英文による論文から成り、世界的にもきわめて高い評価を受けるに至っている。会員数1,500名、外国会員も多くなり現在100名に達している。このようにして日本海洋学会は健在にその活動を続けているのである。

### 17. 昭和16年——心機一転——人生は40から

昭和16年東大に地球物理学教室ができたので、海洋物理学の講座を受けもたないかという話が藤原先生からあった。転任の時期は昭和17年4月であるという。岡田、堀口両先生ともに賛成されたのでお受けすることにした。

昭和16年12月7日は日本が米英に宣戦を布告した日である。その後12月中旬になって「妻の病篤し」と聞き上京して病院を訪ねた。妻は衰えてはいたが意識はハッキリしていた。腕の中の2本の骨がはっきり見えた。ちょうど近頃原子力関係で使われるマジックハンドのように上下に動くのを見ると不思議に感じられた。私に向かっていろいろ話をしたが、最後に「いずれもうこの世では会えないと思いますからお元気で。」といった。私は後ろ髪を引かれる思いで療養所を去った。間もなく「妻ひさ子死す」という電報を受取ったので早速上京した。暮の25日に亡くなったと聞いた。妻はすでに数本の骨と化し、小さい壺に入っていた。私はこの遺骨を抱いて寺に詣で、数名の関係者と共にその冥福を祈った。淋しい葬りであった。

昭和17年が明けた。私はもうそろそろ40歳に近かった。運輸技官から東大教授に転任し、職場も神戸から東大に移ることになった。思えば神戸在勤15年、その大部分は波瀾重畳を極めた苦難の年月であった。生理的にも研究の能率は確かに低下していた。そのいたでは現在に至っても回復していないと思う。この思い出の悪い神戸を去り、東京の新しい職場で働くことになって、何だかさっぱりした思いであった。それに「人生は40から」といった抱負もあって、新鮮な気分を以て精進した。

東大教授として講義を始めたのはその年の4月であるが、私の身柄はさしあたり運輸技官で中央気象台勤務兼東大講師であった。その頃中央気象台では新たに海洋課が発足し、以前神戸にいた佃十吉先生が課長で私はその下に勤務したが、それは名ばかりで実際は東大の講義に専念していた。そしてその年の10月、正式に東大教授となった。東大の教室は松沢武雄先生が主任で、その他に坪井忠二、河角広、永田武両助教授、気象学の小平吉男助教授がその幹部であった。藤原先生は中央気象台長であったが東大教授を兼任されていた。

その年の夏学生の実習のため、数年前訪れたことのある山中湖を選び、簡単な湖沼観測を試みた。その中には現東大教授竹内均、気象庁の小泉政美、同じく南日俊夫、気象大学校長の山本孜、電波物理研の原田美道、水産庁の土井長之、それに化学教室の現東京理科大学教授、成城大教授の中埜邦夫および川村静一等の諸君があった。

### 18. 岩波茂雄さんのこと

昭和18年の秋のある日、岩波茂雄さんが突然小型自動車で、私がついさきほど引越して来た新居にやって来た。「家を見に来たぞ」と大きな声で叫んだ。彼はいき

なり玄関から上がって応接間に入り椅子に坐るまもなく、虎のごとく部屋の中を駆回り、私どもが応待して茶を出す暇もなく「うん、これはよい。」とつぶやいてまた風のごとく去って行った。岩波さんには若い時から大分お世話になったが、いろいろ書きたいことがある。まず第一に特筆すべきは、この年の11月3日明治節の夜、大東亜会館（今の東京会館）で朝野の名士500余名を招いて行なわれた「回顧30年謝恩晩餐会」である。私も若輩ながら幸いにして末席に列する光栄に浴した。当夜の司会者は安倍能成先生で、列席者は文字通り日本文化の代表者であった。井上哲次郎、桑木敏翼、波多野精一、安倍能成、石原謙、和辻哲郎、天野貞祐等の哲学者、田中館愛橋、長岡半太郎、中村清二、岡田武松、藤原咲平、寺尾博、高木貞治、穂積重遠、佐々木信綱、那須皓、高橋誠一郎、小泉信三、吾妻栄なぞ学界のお歴々、さらに三宅雪嶺、幸田露伴、島崎藤村、武者小路実篤、高村光太郎、長与善郎、豊島与志雄、久保田万太郎、野上豊一郎、茅野肅々等文壇の雄、それに中村吉右衛門、山本安英、安井曾太郎等の芸術家に牧野伸顕、原嘉道、尾崎行雄、安部磯雄、伊沢多喜男、後藤文夫、青木一男、橋田邦彦等の政界首脳、中村良三、塩沢幸一、宇垣一成、米内光政等の大将、郷古潔、十河信二、淡沢敬三等の財界人をはじめとする名士が綺羅星のごとく居並ぶ光景を見て、よくもこれほどのオールスターキャストができたものだと思嘆したものである。

すでに戦況は明らかに我に非である。物資もしいに窮迫していたが、その御馳走たるやまた豊富であった。岩波さんの社会的信用がいかに高かったかを示すものであったろう。開会の劈頭、岩波さんは正面のメインテーブルの中央に起立して挨拶を長々と述べ、自分の生立ちや事業について語り、ここに列している方々や過去30年お世話になった人々に対する感謝感激の赤心を披れきした。この宴会の詳細については岩波書店刊行「図書」第7年第83号（すなわち終刊号、昭和17年11月25日）に詳しい。

これに対し三宅雪嶺、牧野伸顕、小泉信三、幸田露伴、明石照男、天野貞祐、安井てつ子、藤原咲平等諸先生の祝辞があった。また病気で列席されなかったが、西田幾太郎先生の「すでに始あり、また終なかるべからず。」というメッセージは一同に深い感銘を与えた。最後に安倍先生の司会者閉会の辞があって、この曠古の盛宴は10時近くに漸く幕を閉じた。岩波さんはすでに亡く、上に列記した方たちも多くは白玉楼中の客となられた。

その頃、私のうちによく遊びに来た神田の某レストランのお嬢さんで親しい人が、洋酒の瓶を5、6本持参した。いずれも使いさしであったが、半分位はまだ入っていた。先刻岩波さんが来て下さったお礼に、今度は正式に夕食にお招きして、同時に先年渡米した際御馳走になった坂西志保さんもお呼びした。岩波さんは「この時世にこんなよい酒にありつくとは」と大変な御機嫌で、坂西さんと口を揃えて日本の軍閥を攻撃されたのを覚えて

### 19. 戦時研究と私

昭和19年4月18日、私は妻と赤坂檜町にある知人のお宅を訪ねていたが、突然数発の砲声を耳にすると同時に低空を飛んで去ってゆく数台の飛行機を見た。これは米國ゾーリ大佐の指揮する米軍機であったことを後で知った。

藤原先生はつとに時局を憂慮され、すでに前の年の秋から「君は竹内能忠君らと水中音波の実験をやってみてくれないか。」といわれ、当時中央気象台の海洋課長でもあった私は、三宅泰雄、竹内能忠らの諸君を中心として音波伝播の実験をはじめた。このグループは現地の沼津江の浦の海軍技術研究所音響実験部へ行って、気象台の船で研究することになった。その頃同じ目的で東大の檜山義夫教授が現地で研究され、敵の潜水艦のプロペラの音を聞きにくくする雑音は、インモチという小さな魚の鳴声であるという結論を出された。この種の実験に参加した人たちは海洋気象台の松平康男、斉藤行正両氏が豊後水道で、また私どもは岳麓河口湖や芦ノ湖で補助の実験を試みた。これらの実験結果から水路部の桑原新、気象台の竹内能忠両氏は日本近海の音響聴取度の図を作った。

また私どもはこの夏敵前上陸の一助にと考えて伊豆白浜と房州片貝で波浪の観測を試みた。参加したのは竹内、渡辺信雄、吉田耕造、原口勘助、武石武の諸氏と私とであった。これは対岸米國でスヴェルツルプおよびムンクが昭和22年発表した波浪予報の資料としての観測と時を同じくして行なわれたが、我々は十分な理論的根拠を発見できず、ついに彼等をして名をなさしめたのは惜しい限りであった。

この年のはじめ、関口鯉吉先生は気象台で私どもとの冗談の中で「台湾を占領されちゃ砂糖もなめられないぞ。」といった。私は砂糖ならまだよいが重要物資が輸送できなくなったらどうしようと心配した。これについて私は海流瓶（あるいは漂流瓶）の漂流結果から得た統

計的結論として、南東季節風の吹く4月から9月までの間に台湾の北端付近で投込まれた海流瓶の30ないし50%は、黒潮に乗って日本本土沿岸のどこかに漂着するという事実を思い当たった。この年の10月、私は学術研究会議でこのことを講演し、国立水産試験場の木村喜之助博士からも御自分の研究を基として賛同を得たし、宇田道隆博士もこれを支持された。また日本海には反時計式の環流があって、朝鮮東岸で海中に投入された海流瓶はほとんど9割まで裏日本沿岸に漂着することも既定の事実であった。そこで私は台湾・朝鮮のガソリンはドラム缶のまま海中に投入すればよいし、満州の大豆も適当に梱包して日本海に投入すれば、その大部分を本土に輸送できることを確信した。しかし11月末になると我々は台湾も失った。私の知る限りではこの計画は実行されなかったようである。

その頃私は正式に戦時研究員として内閣から辞令を貰っていた。私の戦時研究は2つであった。その1つは、当時東京天文台長関口先生の要求でシュミット・カメラのレンズの形を計算で決定することで、その終局の目的は暗視装置<sup>ナイトビジョン</sup>を完成することにあった。ただしこの研究はついに完成を見ずして終戦を迎えてしまった。もう1つは東大工学部教授・陸軍少将・工学博士佐々木達治郎さんを首班とするロケットの弾道を計算する作業で、山内恭彦、雨宮綾夫、蓮沼宏、吉田耕造の諸氏と私が召集された。私どもは五日市のある旅館に数日缶詰にされて、佐々木先生以下全力を奮ってタイガー計算機をガリガリ回したが、なかなか方程式は解けない。ロケットの弾道の計算に一同死に物狂いであった。しかし戦況はますます我に不利であった。日本の船舶で毎月米潜水艦に撃沈される数はしだいに増えて来た。この事態に対して軍の研究所はもはや尽す術を知らなかったのか、ある日海軍技術研究所長子爵徳川家定中將は我々専門家を研究所に召集して軍の窮状を訴えて学者の協力を求めた。この日集まった中には長岡半太郎、八木秀次、野滿隆治等の大先生の顔も見えた。徳川中將の意向はすぐわかった。沼津に音響実験部という支部があって、目下全力をあげて対策を練っているが、我々にも助力して欲しいというのであった。沼津の研究所には私と東大物理の同僚である久山多美雄さんが技術大佐として日夜心を砕いていた。それで一行は佐々木達治郎、藤岡由夫、山内、雨宮他数名、それに私で、当時通称「新撰組」と呼ばれていた。そこでまず皆で久山大佐のところへ攻込もうというのであった。ところがあらかじめ通知してあったのでこれは



困ったと思ったのか、下にも置かないサービスである。所内を見学しているうちに「空襲!!」と叫び声があちこちから聞こえた。確かに空襲であった。部長の安場中将は防空服に身をかため、部下を指揮した。これが11月24日の東京初空襲であった。その晩の宴会の席上で安場中将は「いやすごい、何十機あったでしょうね。皆B29でしたよ」と笑って語った。何機撃墜したとかその日の新聞に出ていたが、実は総計70機、1機体当たりで撃墜したことだけは確実であったが、その他は全部無事サイパン基地に帰ったとの話であった。

## 20. 疎開と戦後

私は戦争が激しくなるにつれて科学者として戦争に協力をする点人後に落ちないつもりであった。海流輸送については政府および軍の首脳部に説きすぎるほど説いたが当時の首脳部が科学的理解力をもたなかった（故八木総裁の談）ためか、いっこうに理解してもらえなかった。仕方なく私は家族をつれて市ヶ谷の家を捨て、東大理学部地球物理学科の職員、学生たちと共に昭和20年3月30日午前2時疎開先岩村田に向かって上野駅から都落ちすることになった。私たち親子3人の他に吉田耕造助手（現東大教授）に川端美智子さんも同行した。

海流輸送の実施についてはできる限りの努力を払った。これで実行できないなら日本も終わりだ。この問題に関して印刷した説明用のパンフレットは皆破って捨てた。これからは信州の静かな高原で若い大学生諸君と暮して次代の日本を担う人材の養成に尽したい、等々考えながら旅をつづけた。汽車が軽井沢を過ぎ小諸についたのが14時半、実に12時間半の旅であった（現在は3時間）。

終戦の夜は近くの家に疎開していた故正野重方博士と「新しい日本」の発足を祝して乾盃した。9月末約10名の卒業生を出し、岩村田の郊外、岩児温泉で盛大な（その頃では）送別の宴を張り、酒もいくぶん出た。

12月の初めになると信州は寒気耐え難いのであるが、東京の自宅は戦火で焼け帰る家もない。ほうぼう探した末、経堂の中埜邦夫さん宅の離れの茶席を拝借して住むことになった。翌昭和21年1月12日帰京して経堂の生活が始まる。

この頃私は43歳であった。中埜さんのお宅は約500坪ほどの広い敷地に建っていて私どもの拝借している茶席も大変立派であった。茶席の周りには木立が茂り、母屋との間には広い芝生があった。焼出された身分には過ぎた仮住居であった。



写真3 昭和23年前後、「特別講義」で、新着論文を毎週2、3編熟読して紹介した。その準備をしているスナップ。

間もなく外国の文献が来るようになった。昭和23年前後は私が最も張切っていた時代であったろう。まだ旧制であったので大学院でなくても「特別講義」があり、新着の海洋物理に関する優れた論文を毎週2、3編熟読し、これを2時間ほどで学生諸君に紹介したが、大変評判がよく、学外の人達もよく聴講に来たものである。しかし、このような芸当は並大抵の努力でできるものではなく、新制になったのを機会に止めてしまった。

その頃中央気象台長藤原咲平先生から私に「水路部長になって欲しい」との連絡があった。しかし私は「学者として一生を学問の研究に捧げる決心であるが、兼任でよいなら。」とかがいをたてたところ、「なにぶん行政官庁だから兼任は困る。」とのことであったので、私は東大教授としての自分の職務の重大性を考えて「東大教授を止めて水路部長になる理由を発見できません。」と藤原先生の御好意を辞退した。私は一介の学究として生きたかったし、またそこに大きな意義を見出していたからである。

昭和28年10月第8回太平洋学術会議がマニラで開かれる直前ユネスコが主催する海洋学者の会議が開かれ、東南アジアのどこかに海洋研究所を設置する案を相談することになった。当時私は米国にいたが第8回太平洋学術会議およびこの会議に出席するために帰って来た。およそ20名ほどの海洋学者が集まったが結論として「そのような研究所は不要」というのであった。そして日本ユネスコの幹部はこれに対し何の反論を出すこともできなかった。

私ども日本の海洋学者や水産学者が一同となって東大海洋研究所の設置に着手したのはこの時であった。研究所が発足するまでに10年近い歳月を費したが、私をしていわしめればたとえユネスコが海洋研究所設立に尽力しても東大海洋研究所ほどのものは、あるいはその半分のものさえできなかったであろう。

昭和40年の初夏私はパリにある海洋研究所から私の研究業績に対しモナコ大公アルベール1世記念賞牌 (Medaille Commemorative du Prince Arbert 1er de Monaco) を贈る旨同研究所の運営委員会委員長フォンテーヌ (M. Fontaine) 教授から手紙を貰った。授賞式は昭和41年1月15日パリの研究所内で内外の海洋学者4, 50名が参集して行なわれたがフォンテーヌ教授は英語で授賞の理由を述べた。これは私がフランス語を理解できないための配慮であったろう。私はこれに対して日本語で謝辞を述べ、日本大使館にいる友人高橋清さんがフランス語に訳述した。過去における受賞者たちは(1)モナコ大公ルイ2世(1948), (2)海洋研究所(1948, 仏), (3)ハンス・ベッテルソン(1949, スウェーデン), (4)ポリティエ(1950, 仏), (5)ビグロウ(1950, 米), (6)ベルトラン(1951, 仏), (7)アントン・ブルウン(1952, デンマーク), (8)ウォーおよびウルム(1954, 仏), (9)カラザース(1954, 英), (10)ファージ(1955, 仏), (11)オスボーン(1956, 米), (12)ルーシュ(1957, 仏), (13)ゼンケヴィチ(1958, ソ連), (14)モスピー(1960, ノルウェー),

(15) スティーマン・ニールセン(1961, デンマーク), (16)ダコナ(1963, 伊), (17)ギフォード・ユーイング(1963, 米), (18)日高孝次, でその後は本部に聞かなければ判らない。

このメダルの半数はフランス人に授与され半数が外国人である。外国人でいただいた人は十数人であろうから私は大変名誉なことだと感激している。

私は昭和46年私財2,000万円を投じて日高海洋科学振興財団を創設し, 47年日本学士院会員に推され, 49年勲2等旭日重光賞を授けられた。また日本海洋学会, 日仏海洋学会の名誉会員, Honorary Life Fellow of Pacific Science Association, 東大名誉教授, サン・マルコス大学(ペルー国リマ市)名誉教授, 東海大学客員教授の栄誉を与えられている。

ある意味において私は日本の海洋物理学とともに歩いて来たと思っている。そしてこの半世紀の間の出来事を私なりの観点から記述しておくことも無駄ではないと信じ本稿を起こしたしだいである。

しかし総てこれらの波瀾曲折はもはや遠い過去に霞んでしまい、総てはただ昨日のできごとのように思われる。私は毎日中野区南台の東大海洋研究所の一研究室で、昔神戸にいたとき、太平洋のここかしこを巡りながら、そして戦後東大で研究と講義に張切っていた頃と同じ雰囲気にひたりつつ、私の後継者たちによって運営される日本の海洋研究を冷静に眺めながら楽しい日々を研究三昧に送っている。